西日本新聞　2021年5月19日（水）朝刊
（第3種郵便物認可）

「展示映像」とは何か

寄稿　脇山真治

最先端の「一点もの」保存の一歩を福岡から

1900（明治33）年、フランスのパリで万国博覧会が開催された。エッフェル塔のそばに「シネオラマ」（Cinéorama）というパビリオンがあった。気球に乗って世界遊覧のイメージ旅行を楽しむかのような、なんと映写機10台を人力で同期させた360度の全周映画館である。客席は巨大な気球のゴンドラという設定。映画が発明されてわずかな5年後の野心的な試みだった。これが「展示映像」の初出展と考えられる。今日にいたるまでイベントのたびに多くの展示映像が制作されてきた。映画と違って作品リストは未整理だが、今なお世界中でつくり続けられている。

展示映像についての正確な定義はない。一般的には博覧会や見本市等の広義のイベント、博物館等の文化施設、テーマパークやショッピングモール等の商業施設などで使われる映像の総称である。制作と上映の形式や音響のシステム等は多様であり「世界標準」とは無縁の特殊な映像である。

その展示映像はほとんど残されず、廃棄されたり所在不明になったりしてきた。つまり、後の時代の制作者は過去の作品を参照できず、研究者は展示映像の歴史や作品分析をする状況にないのである。関係者は「展示映像は一過性の映像」と考えていて、そもそもアーカイブするという発想もなかった。

展示映像は相応の予算を投入し、挑戦的で斬新な企画が多い。新技術と画期的な表現を競いながら時代の最先端の映像パフォーマンスを繰り広げているのである。たとえばミラノ万博（2015年）のイタリア館、タイ館、アスタナ万博（17年）のモナコ館などは鏡面反射、プロジェクションマッピング、スクリーンの動的効果等の組み合わせで独自の演出をみせた。

筆者は、同時代のすぐれたクリエーターが関与した貴重な映像と関連資料を残すことの重要性を感じ、4月に一般社団法人「展示映像総合アーカイブセンター」を福岡市に設立した。全国に類を見ないこの活動は、展示映像の収集と保存に加え、限定的な公開も目指す。また仕様も規模も多様な映像をどのような方法で残すのか、その指針も検討中である。一刻も早くこれらを関係者と共有して作品の散逸・廃棄を防ぎたい。

映画はいわゆる「標準仕様」があり、フィルムでもデジタルでもそれに準拠している限りは、世界中のどの映画館でも上映が可能である。展示映像は上映空間のデザイン、スクリーンの形状、座席の配置（あるいは立ち見なのか）、特殊な音響設計、照明効果など関連の要素も含めて「作品」として成立する。たとえばつくば科学万博（1985年）のIBM館。直径32mのドームスクリーンの中に5mの球形スクリーン。フィルム映写機は70㎜と35㎜を計11台に、8チャンネルの音響システム。観客は1周およそ8分のターンテーブル上で鑑賞する…という具合である。国際博らしい大規模な仕掛けだが、このような特殊性がアーカイブを困難にしている理由のひとつと考えられる。作品全体の複製などあろうはずもなく、一点ものである。

2005年に開催された愛知万博のころから映像はほぼデジタルとなり、展示映像の範囲も急速に拡大している。ライブコンサートのステージ映像、プロジェクションマッピング、VRゴーグル映像など、先進的な事例が次々に紹介されている。これらを残すにも再現の（疑似的な）方法、権利関係の整理、管理費用の確保など課題は多いが、何としてもアーカイブを前に進めねばならない。

先日、長崎市内のある制作会社から作品データの寄贈の話があった。2010年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」にちなんで制作されたプロジェクター3台によるパノラマ映像である。10年ぶりに内容を確認した。これでまたひとつの展示映像作品が守られた。

ミラノ万博（2015年）イタリア館の展示映像

つくば科学万博（1985年）のIBM館
（撮影・松尾悟氏）

文化
ファクス 092（711）6243
メール bunka@nishinippon.co.jp

わきやま・しんじ　九州大名誉教授。1953年、福岡県出身。九州芸術工科大卒。2019年3月まで九州大教授。09年より展示映像のアーカイブプロジェクトを進めてきた。